岐阜経済大学論集 37 巻 3 号（2004 年）

“了”の位置とそのアスペクト機能

劉　綺紋

1. はじめに
2. 2つの位置の“了”に関する先行研究の考え方
3. 状態動詞・形容詞の直後でかつ文末の“了”はどちらの“了”か？
3.1. 文末の“了”もしくは混合体の“了”とする考え方
3.2. 文末の“了”もしくは混合体の“了”とする問題点について
3.3. 単なる動詞直後の“了”とする考え方
3.4. 単なる動詞直後の“了”とする問題点について
4. 限界達成という意味の完結相
4.1. 動態動詞(句)と結び付く“了”
4.2. 動態動詞直後でかつ文末の“了”
4.3. 状態動詞(句)と結び付く“了”
4.4. 形容詞(句)と結び付く“了”
5. 位置によって機能上の相違が生じる理由
6. おわりに

1. はじめに

中国語の“了”は，アスペクト領域にも，程度領域にも，モダリティ領域にも用いられている，使用頻度が非常に高い，重要なマーカーである（春木・劉（2003），劉綺紋（2004））。さらに“了”は，動詞や形容詞の直後にも，文末にも置かれる。例えば，(1)～(3)において，“了”はそれぞれ動詞直後・形容詞直後・文末に位置している。

(1)　長馨在鏡子裏向那小大姐做了個眉眼，兩人不約而同也都笑了起來。

（金鎖記）（長馨が鏡のなかで女中に目配せし，ふたりは期せずして同時に笑い

だした。(池上))

(2) 林黛玉不覺的紅了臉,……(紅樓夢 二十五) (黛玉は思わずぱっと顔を赤らめて,……(松枝 三))

(3) 葉景奎是他最後的一個朋友了。(赤地) (葉景奎は彼の最後の友人なのだ。)

さらに,“了”は1つの文の中で,動詞・形容詞の直後と文末という2つの位置に同時に置くこともできる。例えば,次の例文に示されるように。

(4) (敦鳳)現在很快樂,但也不過份,因爲總是經過了那一番的了。(留情) ((敦鳳は)いまは幸せだといえるが,その幸せもほどほど。なんといっても過去に一度結婚しているのだから。(池上))

動詞・形容詞と目的語・方向補語や数量補語などとの間に位置する“了”は,一般に「動詞直後の“了”」や「アスペクト助詞の“了”」や「“了$_1$”」と呼ばれている(例えば,(1)や(2)の“了”)。それに対し,文末に位置する“了”は一般に「文末の“了”」や「語気助詞の“了”」や「“了$_2$”」と呼ばれている(例えば,(3)の“了”)。以下本稿では,便宜上それぞれ「動詞直後の“了”」,「文末の“了”」と呼ぶ。

さて,このアスペクト領域・程度領域・モダリティ領域における“了”の諸機能に対し,春木・劉(2003)において統一的な説明を与えた。本稿は,この考察に基づき,動詞・形容詞の直後と文末という2つの位置の“了”におけるアスペクト機能に対して,統一的な説明を試みたい。

まず,次の第2節では,2つの位置の“了”に関する先行研究の考え方を概観する。

2. 2つの位置の“了”に関する先行研究の考え方

先行研究は,動詞直後と文末という2つの位置の“了”の機能について,どのように考えているのだろうか。

この点について，まず，どちらも同じ機能を担っているとする研究がある。例えば，高名凱(1948)はどちらの“了”も「完成相」のマーカーとし，刘月华ほか(2001)はどちらの“了”も「実現」を表すとする[1)]。

しかし殆どの先行研究は，2つの位置の“了”を機能が異なる2つのマーカー，すなわち「2つの同音同形異義語」と考えている。例えば，黎锦熙(1924)，王力(1943–1944; 1944–1954)，Яхонтов(1957)，Chao(1968)，吕叔湘主编(1999)，Li & Thompson(1981)，Smith(1997)，木村(1997b)，楊凱栄(2001)など，いずれもそうである。

例えば，王力(1943–1944; 1944–1945: 217)では，“了”を2種類に分けている黎锦熙(1924)は実に正しいと述べる。そして，動詞直後の“了”を「完成相」のアスペクトマーカーとし，文末の“了”を「決定のムード（“決定語氣”）」のマーカーとする。また，Li & Thompson(1981)では，動詞直後の“了”を「完結相（perfective）」のアスペクトマーカーとし，文末の“了”を「現在と関連性のある状態（current relevant state）」のマーカーとする。

また，その他の殆どの研究では，動詞直後の“了”の機能を，「完結相」や「完了(相)」とし，文末の“了”の機能を「実現」や「変化」や「新事態の発生」などの用語で定義している（例えば，木村(1997b)，吕叔湘主编(1999)，楊凱栄(2001)など）。これは現在の通説となっている。

しかし，動詞・形容詞と目的語・(方向や数量)補語との間の“了”と，文末の“了”とを異なったマーカーとするという通説の立場に立てば，次の(5)～(7)のような“了”がどちらの“了”なのかが，当然問題となってくる。

(5) 炸彈爆了。（爆弾は爆発した。）

(6) a. 祥子病了。（駱駝 十八）（祥子は病気になった。（立間））

b. 楊太太也覺得了，……（留情）（楊夫人もそう感じた。……）

(7) a. 柔嘉臉紅得像鬥鷄的冠，眼圈也紅了，……（圍城 九）（柔嘉の顔は闘鶏のとさかみたいに真赤で，目のふちも赤くなったが，……（結婚））

b. 振保笑道:“看見了你,不俏皮也俏皮了。”(玫瑰) (振保は笑って,「きみに会ったら,しゃれでなくてもしゃれになるよ」)

(5)(6)における“了”は「動詞直後でかつ文末」の“了”であり,(7)における“了”は「形容詞直後でかつ文末」の“了”である。

実際,これらの“了”がいったいどちらの“了”なのかは未だに統一見解がない。例えば,(5)のような「動詞(動態動詞)の直後でかつ文末」の“了”について,Li & Thompson (1981) では,動詞直後の“了”と,文末の“了”と,2つの“了”の「混合体」という3つの可能性がある,としている。一方,吕叔湘主编 (1999) では,文末の“了”と,混合体の“了”という2つの可能性がある,としている。

また,(6)のような「動詞(状態動詞)の直後でかつ文末」の“了”や,(7)のような「形容詞直後でかつ文末」の“了”についても,従来考え方が分かれている。例えば,Chao (1968) や刘月华ほか (2001) では,この“了”を文末の“了”とする。また,Li & Thompson (1981) や吕叔湘主编 (1999) では,この“了”は場合によっては文末の“了”であり,場合によっては2つの“了”の混合体である,とする。それに対し,Яхонтов (1957) や木村 (1997b) では,この“了”を動詞直後の“了”とする。

では,「動詞・形容詞の直後でかつ文末」という位置の“了”について,これほどまでに議論が分かれているのはなぜだろうか。また,他の場合の“了”をも視野に入れつつ,この場合の“了”に対しても統一的な説明を与える方法はないのだろうか。そこで,まず次の第3節において,「状態動詞・形容詞の直後でかつ文末」という位置の“了”に関する先行研究の成果を批判的に検討する。そして,第4節では,いずれの位置の“了”のアスペクト機能にも一貫した説明を与える。第5節では,“了”が異なる位置に置かれることで違いを感じる原因を説明する。

3. 状態動詞・形容詞の直後でかつ文末の“了”はどちらの“了”か？

3.1. 文末の“了”もしくは混合体の“了”とする考え方

状態動詞・形容詞の直後でかつ文末の“了”（例えば，“(臉)紅了”の“了”）は，「単なる動詞直後の“了”ではない」と考えている先行研究は非常に多い。この3.1節では，このような考え方を持つ代表的な先行研究を見てみる。

まずChao (1968) では，“了”を動詞直後の「動詞接尾辞 (verbal suffix)」の“了”と，文末の「小辞 (particle)」の“了”とに分けている。そして形容詞や状態動詞と結び付く“了”については，例えば，“大了三寸”（十センチ大きい），“病了一場”（一回病気した）のように，後に数量補語などがある場合，その“了”は動詞接尾辞の“了”であるとする。それに対し，後に数量補語などがない場合，その“了”は文末小辞の“了”である，とする (p. 668)。

また，刘月华ほか (2001) では，動詞直後の“了”を「アスペクト助詞 (“動態助詞”)」の“了”と呼び，文末の“了”を「語気助詞 (“語氣助詞”)」の“了”と呼ぶ。そして形容詞や状態動詞と結び付く“了”について，例えば“(他的臉)紅了一陣子”（彼は顔をしばらく赤らめた）のように，後に時間補語がある場合，その“了”はアスペクト助詞の“了”であるとする。一方，例えば“亮了”のように，後に時間補語がない場合は，その“了”は語気助詞の“了”であるとする (p. 364)。

ということは，Chao (1968) も刘月华ほか (2001) もどちらも，“(臉)紅了”のような“了”を文末の“了”と考えているのである。

また，この“了”はすべてが文末の“了”であるとまでは言い切っていな

いが，少なくともそれは単なる動詞直後の“了”ではない，とする折衷的な意見も多い。次に，このような考え方を持つ代表的な先行研究を見てみる。

まず，Li & Thompson (1981) では，動詞直後の“了”を「動詞接尾辞 (verbal suffix)」の“-le”と呼び，文末の“了”を「文末小辞 (sentence-final particle)」の“le”と呼んでいる。そして，形容詞と結び付く“了”については，その形容詞が「内在的限界 (inherent end point)」を持つかどうかによって，その“了”を2つの“了”に分けている。すなわち，内在的限界を持たない形容詞と結び付く“了”は文末小辞の“le”であるとし，次の例文(8)を挙げている。それに対し，内在的限界を持つ形容詞と結び付く“了”は，“le”と“-le”との混合体の“LE”であるとし，次の例文(9)を挙げている。(例文の下線と英語訳は Li & Thompson (1981: 250–252) による。なお，Li & Thompson (1981) は“-le”“le”“LE”を区別して表記している。)

(8) 文末小辞の“le”：

a. 這朵花紅了。(This flower is now red (i.e., has turned red).)

b. 他(她)高了。(S/He's gotten tall.)

(9) 混合体の“LE”：

a. 她懐孕了。(She got pregnant.)

b. 啤酒喝光了[2)]。(The beer got drunk up.)

また，吕叔湘主编 (1999) では，動詞直後の“了”を“了$_1$”と呼び，文末の“了”を“了$_2$”と呼んでいる。そして，形容詞に結び付く“了”について「ある変化がすでに完了し新しい状況が出現したことを表すことができ，“了$_{1+2}$”と解すべきである。ただし，当面の状況にだけ着目しているときは“了$_2$”と解してもよい」と述べている (牛島・菱沼監訳 (2003: 242))。

ということは，Li & Thompson (1981) と吕叔湘主编 (1999) とは，その基準を異にするものの，どちらも形容詞や状態動詞の直後でかつ文末の“了”を，文末の“了”もしくは混合体の“了”と考えているのである。

以上，本節で見た先行研究は，いずれも「状態動詞・形容詞の直後でかつ

文末」の“了”を，文末の“了”としたり，あるいは，文末の“了”もしくは混合体の“了”としたりする考え方である。このような考え方は，実は従来の最も一般的な考え方である。次の3.2節では，このような考え方の問題点について検討したい。

3.2. 文末の“了”もしくは混合体の“了”とする問題点について

3.1節で見たように，多くの先行研究は，「状態動詞・形容詞の直後でかつ文末」の“了”を，文末の“了”としたり，あるいは，文末の“了”もしくは混合体の“了”としたりしていた。換言すれば，この“了”は，「単なる動詞直後の“了”」ではない，と一般に考えられているのである。その理由は，何だろうか。この点について，これらの先行研究における，動詞直後の“了”や文末の“了”についての定義から，その手掛かりを探してみたい。

まず，動詞直後の“了”は，これらの先行研究ではどのように定義されているのだろうか。この“了”について，Chao (1968: 246) では「完成した動作 (completed action)」を表すとし，Li & Thompson (1981: 185) では「完結性 (perfectivity)」を表すとし，また吕叔湘主编 (1999) では「完成」を表す，とする。但し，刘月华ほか (2001) では「実現」を表すとし，以上の3つの先行研究とやや異なる定義をしている。

次に，文末の“了”は，どのように定義されているのだろうか。この“了”について，Chao (1968) では「開始」を始めとする7つの機能を持っているとし[3]，Li & Thompson (1981) では「状態変化」を始めとする5つの機能・用法を持っているとする[4]。また，吕叔湘主编 (1999) では「変化」を表すとし，刘月华ほか (2001) では「実現（新状況の発生・変化）」を表すとする。

つまり，これらの先行研究のうち，刘月华ほか (2001) はどちらの位置の

“了”も「実現」と定義しているが，それ以外の研究はいずれも完成・完結を動詞直後の“了”の機能とする一方，開始・変化を文末の“了”の機能とするのである。このことから，「状態動詞・形容詞の直後でかつ文末」という位置の“了”を，文末の“了”もしくは混合体の“了”とする理由が推測できよう。

すなわち，それは次のような理由である。例えば“(臉)紅了”の意味からも分かるように，この場合は完成を表さずに，開始・変化を表す。そして，開始・変化は動詞直後の“了”の機能ではない。従って，この“了”は開始・変化を表す文末の“了”であるか，あるいは開始・変化を完成する混合体の“了”であるか，そのいずれかである，という考え方である。但し，刘月华ほか(2001)は，動詞直後の“了”も文末の“了”も「実現（変化)」を表すとしているのに，この“了”を動詞直後の“了”ではなく，あえて文末の“了”と規定している。おそらくその理由は，単純に“了”の位置によるものだと考えられる。

確かに，状態動詞・形容詞の直後でかつ文末の“了”だけに説明を与えようとするならば，Chao (1968)，Li & Thompson (1981)，吕叔湘主编 (1999) などの考え方によっても説明することができるかもしれない。しかし，同様な考え方によって次の例文(10)(11)における“了”を説明しようとしても，不可能である。

(10) a. 林黛玉不覺的紅了臉，……（紅樓夢 二十五）（黛玉は思わずぱっと顔を赤らめて，……（松枝 三））

b. 隨著軍官，她並沒享福，可是軍官高了興，也帶她吃回飯館，看看戲，……（駱駝 十七）（軍人のそばで彼女はそう幸福ではなかったのだが，ご主人が上機嫌のときには飯館子へも連れていってもらったし芝居も見た。（中山））

(11) a. 他一到，整個屋子便有了活潑的氣氛。（浮游）（彼がやってきたとたんに部屋に活気がみなぎるようであった。（デイゴ））

b. ……，所以生下亭亭六年之後章太太又懐了第三個小孩，章先生的憂柔是更多於喜悦的。（安安）（……。だから亭亭が生まれてから六年後に，奥さんが三番目の子を身ごもったときは，旦那さんはうれしさより心配の方が先立っていた。（田村））

これらの例文においては，“了”が形容詞や状態動詞と結び付き，いずれも完成を表さずに，開始・変化を表している。そこで，前掲の先行研究の考え方に基づいて推論すると，この“了”は，完成・完結を表す「単なる動詞直後の“了”」ではありえないはずである。

しかし実際，これらの“了”はいずれも目的語などがさらに後接している。このような後置成分がある場合には，いずれの研究もその“了”を動詞直後の“了”として扱い，これを文末の“了”として扱う研究はない。

つまり，たとえそれが単なる動詞直後の“了”でしかありえない場合でも，量規定が与えられていない限り，状態動詞・形容詞と結び付いた場合は，いずれにせよ開始・変化を表す。ということは，“(臉)紅了”などの「状態動詞・形容詞の直後でかつ文末」という位置の“了”が開始・変化を表すからといって，それを「単なる動詞直後の“了”」ではないと断言することはできないのである。

3.3. 単なる動詞直後の“了”とする考え方

もちろん，上述の先行研究と考え方を異にする研究もある。例えば，Яхонтов (1957) や木村 (1997b) などがそうである。

Яхонтов (1957) では，動詞直後の“了”を「過去完了テンス」を表す接尾辞とし，「若干の無限動詞，状態動詞，形容詞とともに用いられる -la (-了) は，動作の完成ではなく，動作，状態，性質の開始を意味する」としている (橋本訳 (1987: 187))。さらに，「形容詞の後にくる -la (-了) という形態素は，通常，文末の助詞でなく，確かに接尾辞である。なぜなら，形容詞の後にな

んらかの単語がたつ場合，-la（-了）はこの単語の前――直接に形容詞の後に置かれ，文末に置かれないからである」と述べている（橋本訳（1987：189））。

また，木村（1997b）でも，形容詞と結び付く“了”を単なる動詞直後の“了”とする。その理由について，木村（1997b）は張国宪（1995）に基づいて説明している[5]。以下にその概要を紹介する。

“了”が形容詞と結び付いた場合，変化の意味を表せるかどうかと言えば，それは表せるものと表せないものとがある。前者は例えば，“葉子紅了。”（葉っぱが赤くなった。）がそうであり，後者は例えば，“*玻璃杯乾淨了。”がそうである。この後者はかなり不自然な文である[6]。すなわち，“了”によっては，必ずしも形容詞に変化の意味を与えることができるとは限らない。よって，形容詞と結び付く“了”は，変化という機能を担わない。

では，“了”がどのような形容詞と結び付いた場合，変化を表すのだろうか。それは，変化動詞と同様な意味成分を持ち，変化という意味成分を内包する，いわゆる「動態形容詞」と結び付いた場合に限られる。例えば，“(葉子)紅”が動態形容詞である。この場合，動態形容詞に内包する「変化」が，“了”によって「完成」されることにより，結果的に「変化」という意味が現れるのである。つまり，この“了”は，完成という機能を担っているのである。

一方，“了”がどのような形容詞と結び付いた場合，変化を表さないのだろうか。それは，変化という意味成分を内包せず，いわゆる「静態形容詞」と結び付いた場合である。例えば，“(玻璃杯)乾淨”が静態形容詞である。「変化」を内包しない静態形容詞が“了”と結び付いても「変化」の意味を表さないのは，この“了”が「変化」の機能を担っているわけではないからである。

以上のことから，「形容詞の直後でかつ文末」という位置の“了”は，完成という機能しか担わない，ということが分かる。従って，この“了”は，

「変化」の機能を担う文末の“了”ではなく，他でもなく，「完成」の機能を担う動詞直後の“了”なのである。

以上が木村（1997b）の主張の概要である。

このように，Яхонтов（1957）と木村（1997b）とでは，形容詞と結び付く“了”が開始を表すか，あるいは完成を表すかという点においては見解を異にしている。しかし両研究は，いずれもこの“了”を動詞直後の“了”とする点においては共通しているのである。

3.2節ですでに述べたように，“(臉)紅了”だけではなく，“紅了臉”も開始・変化を表す。ということは，“(臉)紅了”の“了”も単なる動詞直後の“了”であるという可能性も捨てきれない。このように考えていくと，Яхонтов（1957）や木村（1997b）のように，“(臉)紅了”の“了”を動詞直後の“了”と規定することで，“紅了臉”が“(臉)紅了”と同様に開始・変化を表すことに一貫した説明を与えることができる。

しかし，Яхонтов（1957）や木村（1997b）によってもまだ説明できない問題点が残っている。次節では，その問題点について考えたい。

3.4. 単なる動詞直後の“了”とする問題点について

この節では，まず木村（1997b）の問題点について考えてみたい。

刘勋宁（1988）では，動詞直後の“了”の機能は完成ではなく，実現である，ということを立証するために，例えば“紅了臉說”（顔を赤らめて言う），“有了媳婦忘了娘”（嫁をもらったら母親のことを忘れてしまった）などの，形容詞や状態動詞などと結び付いた例を挙げている[7]。

それに対し，木村（1997b）では，動詞直後の“了”の機能は実現ではなく完成である，と刘勋宁（1988）に対して反論する（木村（1997a）も参照）。但しその際に，形容詞と結び付いた例については論じているものの，状態動詞と結

び付いた例については一切言及していない。

しかし実は，状態動詞，さらにコピュラ動詞も“了”と結び付いて開始・変化を表すことができる。例えば，状態動詞を用いた前掲の(6)や(11)の例もそうである。また，次のコピュラ動詞を用いた例もそうである。

(12) a. 從宋代起,姓丘的就因爲犯了孔子的諱而被迫多掛了一個耳朵,寫作“邱”,一直到五四運動以後,在“打倒孔家店”的呼聲中,一些姓“邱”的學者才憤憤不平地把這個掛了近千年的耳朵去掉,重新姓了“丘”。(〈中國古代命名的忌諱〉2002年10月12日，http://www.chinesefolklore.com/9/msqt.files/1201msqt.htm)（孔子の名前である「孔丘」の諱(いみな)を犯しているせいで，宋代から，「丘」という苗字の人は「丘」に耳(おおざと)を付けさせられ，「邱」と書かされることになった。五四運動の時になってようやく，「孔家店を打倒せよ」というスローガンの下で，「邱」という苗字の学者たちは憤然として千年近く付けさせられていた耳(おおざと)を捨て，再び「丘」という苗字にした。）

b. (辛楣)：“……。只要女人可以做太太,管她什麼美國人,俄國人。難道是了美國人,她女人的成分就加了倍?養孩子的效率會與眾不同?”(圍城 六)（(辛楣)「……。アメリカ人だろうが，ロシア人だろうが，女は奥さんになれさえすりゃそれでよし。まさかアメリカ人だったら，それで女の成分が倍になるわけじゃあるまい？ 子供を産む効率が並より高いのか？」(結婚)）

例文(12a)は，中国古代の命名の忌諱について述べている。孔子の名前「孔丘」の諱を犯すため，「丘」を苗字としていた人々は宋代に無理矢理に「邱」という苗字に変えさせられ，千年近く経った後ようやく「丘」という苗字に戻した，ということを“重新姓了‘丘’”で述べている。そこで，“姓”(～という苗字である)が動詞直後の“了”と結び付き「～という苗字になった」という変化の意味を表している。

また，例文(12b)における“難道是了美國人”は「まさかアメリカ人だっ

たら（～ということはあるまい）」という反実仮想の意味を表している。“是”（～である）が，動詞直後の“了”と結び付き「～になった」という仮想の変化の意味を表している。

例文(12)や前掲の(6)(11)から，“了”がコピュラ動詞や状態動詞と結び付いた場合は，形容詞と結び付いた場合と同様に開始・変化を表す，ということが分かる。では，状態動詞やコピュラ動詞と結び付くこの“了”の機能も，木村（1997b）の考え方によって説明できるのだろうか。

ここでは，例文(11)(12)における，“了”が状態動詞やコピュラ動詞と結び付いた場合の操作について，3.3節でも紹介した木村（1997b）の論理に基づいて試みに推論してみよう。

まず，(11)(12)の“了”はいずれも文末の“了”や混合体の“了”ではなく，単なる動詞直後の“了”である。なぜなら，これらの“了”はいずれも目的語などがさらに後接しているからである。そして木村（1997b）によると，動詞直後の“了”の機能は完成であり，変化ではない。ということは，「完成」の機能を担う“了”がそれらの状態動詞・コピュラ動詞と結び付き，結果的に「変化」の意味を得るためには，それらの状態動詞・コピュラ動詞が「変化」という意味成分を本来的に持つ，「動態状態動詞」・「動態コピュラ動詞」でなければならない。

このように推論してみると，一見説得力があるように見える木村（1997b）の説明に潜んでいた大きな問題点が浮上する。状態動詞が“了”と結び付く頻度は高いが，コピュラ動詞が“了”と結び付く頻度は確かに低い。さらに，“是”が“了”と結び付く場合，目的語などが後接しない例は数多くあるが，目的語などが後接する例は極めて少ない。その意味においては，例文(12b)はかなり特殊な例と言えるかもしれない。しかしここで(12a)(12b)を挙げることによって問題としたいのは，変化を内包しているとは到底考えられない，同定・指定を示すコピュラ動詞でさえも，動詞直後の“了”と共起させることによって変化を意味させることができる，という点である。

木村（1997b）が刘勋宁（1988）に対して反論する際に形容詞しか問題にしていないのは，「動態状態動詞」という自己矛盾になるのを避けているのかもしれない。状態動詞・コピュラ動詞であるか形容詞であるかにかかわらず，それらが“了”と結び付いて変化を表す場合，変化を起こさせる原因はやはり“了”の方である，と言わざるを得ないのである。

さて，木村（1997b）とは異なり，Яхонтов（1957）では，形容詞・状態動詞などと結び付く“了”は，完成ではなく開始を表すとする。但し，形容詞の後の“了”はやはり動詞直後の“了”である，としている。その理由として，「形容詞の後になんらかの単語がたつ場合，-la（-了）はこの単語の前――直接に形容詞の後に置かれ，文末に置かれないから」（橋本訳（1987: 189））と述べており，次の例文(13)を挙げている（日本語訳と用例出典は橋本訳（1987: 189）による。下線は引用者による。二重線部は，形容詞といわゆる「なんらかの単語」とである）。

（13）a. 王興章……紅了臉。（周潔夫 40）（ワン・シンジャンは……顔を赤らめた。）

b. 確實，我們的理論水平是比較過去高了一些。（毛澤東 III 835）（確かに，我々の理論水準は，過去にくらべると，少し高くなった。）

しかし実は，(14)のような反例も多い。

（14）a. 翠翠一天比一天大了，無意中提到什麼時會紅臉了。（邊城）（翠々は日増しに成長し，偶然何かの話になると，顔を赤くする年頃になった。）

b. 曼青突然昂起頭來很興奮地說，聲音也響亮些了。（電腦）（曼青は突然顔を上げて興奮して言った。声もやや高くなった。）

例文(14)から明らかなように，Яхонтов（1957）の指摘に反して，形容詞の後にいわゆる「なんらかの単語」がある場合でも，“了”はこの「なんらかの単語」の後に置くこともできる。従って，“(臉)紅了”の“了”のような，形容詞直後でかつ文末という位置の“了”は「単なる動詞直後の“了”である」というЯхонтов（1957）の主張は誤りである，ということが分かる。

このように，状態動詞・形容詞の直後でかつ文末の“了”を，単なる動詞直後の“了”と規定しても，やはり問題点があるということが分かった。では，この点についてどのように考えるべきだろうか。次の第4節では，この位置の“了”の機能を，他の位置の“了”の機能とともに明らかにする。

4. 限界達成という意味の完結相

4.1. 動態動詞(句)と結び付く“了”

以上，第3節の分析から分かるように，「状態動詞・形容詞の直後でかつ文末」の“了”を，文末の“了”や混合体の“了”としても，あるいは動詞直後の“了”としても，いずれにしても状態動詞・形容詞と結び付く“了”に一貫した説明を与えることができない。では，その原因は何だろうか。

その根本的な原因は，端的に言えば，動詞直後の“了”は「完成・完了・完結相」を表し，文末の“了”は「変化・実現・開始」を表す，という従来の考え方に固執しているからである。言い換えれば，文末の“了”と動詞直後の“了”とを，異なる機能を持つ2つの異なるマーカーとしてではなく，どちらも同様な機能を持つ1つのマーカーと見なせば，形容詞や状態動詞やコピュラ動詞にかかわらず，また“了”の前後に目的語や数量補語などがあるかどうかにかかわらず，その“了”に一貫した説明を与えることが可能になる。

では，“了”は一体どのようなアスペクト機能を持っているのだろうか。まず次の2組の例文を通して，“了”と動態動詞“洗澡”との関係を考える。

(15) a. 我洗了澡才發現浴缸裏沒熱水。（入浴してから，バスタブにお湯がないのに初めて気づいた。）

b. 他洗了澡就睡覺了。（彼は入浴してから寝た。）

(16) a. “他去哪兒了?”“洗澡了。”(「彼はどこに行ったの？」「お風呂に入った」)

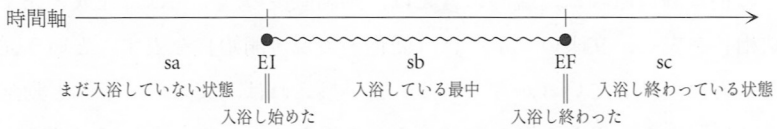
b. 我洗澡了,要睡覺了。(私はお風呂に入ったから，もう寝る。)

(15)の下線部の“了”は動詞直後の“了”であり，(16)の下線部の“了”は文末の“了”である。それぞれの(a)はいずれも「入浴し始めたこと」を表し，それぞれの(b)はいずれも「入浴し終わったこと」を表している[8)]。

では，“了”が“洗澡”と結び付いた場合，なぜこのように2つの意味を表すことができるのだろうか。それは，次の2つの要因による。1つ目の要因は，“洗澡”が2つの「限界」を持つ事象だからである。2つ目の要因は，“了”のアスペクト操作が「限界達成」だからである。

まず，“洗澡”の事象アスペクトを考えてみよう。“洗澡”は時間軸において，洗う行為が開始されてから瞬間的には終わらず，ある時間を経てから終結する，というように展開される。すなわち，次の図に示されるように。

(17) “洗澡”の時間的図式

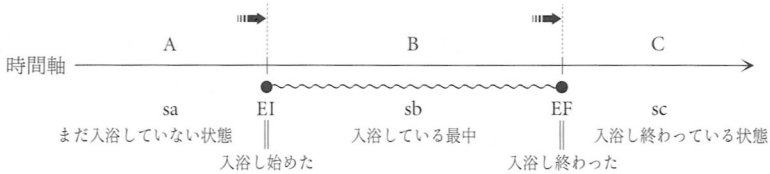


本稿では，動的事象や動的局面の開始点 (event initial endpoint) を EI で示し，その終結点 (event final endpoint) を EF で示す。動的かつ持続的な過程 (process) を波線で示す。この図において，EI は“洗澡”という行為の開始点であり，EF はその終結点である。“洗澡”は，開始点と終結点という2つの「限界 (endpoint)」と，「過程」とを持つ事象である。

次に，“了”の機能を考えてみる。“了”が，開始点と終結点を持つ“洗澡”と結び付いた場合，「入浴し始めた」ことも「入浴し終わった」ことも表すことができる。すなわち，“洗澡”に対する“了”の操作によって，開始点への達成も終結点への達成も表すことができる，ということである。

このことから，“了”は時間軸において「限界達成」という操作を行なっていることが分かる。すなわち，次の図に示されるように。

（18）“洗澡”と結び付く“了”の操作の図式



この図において，限界 EI と状態 sb とを合わせたものが B 領域であり，限界 EF と状態 sc とを合わせたものが C 領域である。一方，限界 EI に到達していない状態 sa が A 領域である。また，時間軸の上部における 2 つの「➡」は，それぞれ EI と EF という 2 つの限界へと達成した，という“了”の操作を示している。“洗澡”に対して，“了”がその EI へと達成したという操作を行なった結果，“洗澡”が B 領域へと移行して「入浴し始めた」ことを表すこととなり，「開始」（従来に言う「実現・変化・開始」）という意味が現れるのである。また，“洗澡”に対して，“了”がその EF へと達成したという操作を行なった結果，“洗澡”が C 領域へと移行して「入浴し終わった」ことを表すこととなり，「完結」（従来に言う「完成・完了・完結」）という意味が現れるのである。

このように，アスペクト領域における「限界」とは，時間軸に位置づけられた事象が展開するにつれて状態が移行する際の，境界・区切りのことである。アスペクト領域において，“了”はこの境界・区切りへの達成という「限界達成」の操作を行なうのである[9]。多くの先行研究では，“了”のアスペクト機能を完結相（perfective）と規定している。より具体的で厳密に言えば，“了”の完結相機能は，何らかの事象と結び付いた場合，その事象における限界の在り方により，その事象の何らかの限界へと達成したという意味での完結相である。つまり，“了”の完結相は「限界達成という意味の完結

相」なのである。

4.2. 動態動詞直後でかつ文末の“了”

前節では，例文(15)(16)の分析を通して，動態動詞(句)と結び付いた場合，その“了”は動詞直後に置かれても文末に置かれても，いずれも「限界達成という意味の完結相」というアスペクト機能を持っていることを明らかにした。実は，従来意見が分かれている「動態動詞直後でかつ文末」の“了”についても，そのアスペクト機能は同様である。

前述のように，「動態動詞直後でかつ文末」という位置の“了”について，Li & Thompson (1981) では，動詞接尾辞の“-le”と，文末小辞の“le”と，混合体の“LE”という3つの可能性があるとしていた。その判断基準については，次の3つの例文によって説明している。(英語訳は Li & Thompson (1981: 299) による。下線は引用者による。)

(19) 炸彈九點鐘爆了。(The bomb exploded at nine o'clock.) …… “-le”

(20) 炸彈已經爆了。(The bomb has already exploded.) …… “le”

(21) 炸彈爆了。(The bomb exploded (and that is what I have to say).) …… “LE”

すなわち，“九點鐘”などの時間詞と共起している場合は完結性を表し，それは動詞接尾辞の“-le”であるとする。一方，“已經”という時間副詞と共起している場合は現在関連性を表し，それは文末小辞の“le”とする。さらに，そうでない場合を混合体の“LE”とするのである。

しかし当然のことながら，“九點鐘”などの時間詞は動詞直後の“了”としか共起しないというわけではなく，文末の“了”とも共起する。例えば，次の例文に示されるように。

(22) a. 九點鐘我給你打電話了。(九時に私はあなたに電話を掛けた。)

b. “遺體運回機場那天你看電視了嗎? ……”(純情) (「遺体が空港に運ばれてきた日，あなたはテレビを見ましたか？……」)

つまり，前掲の(19)に時間詞“九點鐘”があるからといって，その“了”が動詞接尾辞の“-la”であるとは必ずしも断言できないのである。

また，“已經”は文末の“了”としか共起しないというわけでもなく，動詞直後の“了”とも共起する。例えば，次の例文に示されるように。

(23)　水面上已經結了一層冰，在朝陽中亮閃閃的。（赤地）（河はすでに薄い氷が張っていて，朝日の光できらきらしている。）

そこで，前掲の(20)に時間副詞“已經”があるからといって，その“了”は文末小辞の“le”である，とは必ずしも断言できないのである。

以上のことから明らかなように，動態動詞直後でかつ文末の“了”をLi & Thompson (1981) のように3つの異なるマーカーに分けることはできない。

しかし，その位置にかかわらず，いずれの“了”も「限界達成」という同一の操作を行なう1つのマーカーとして考えれば，以上のような矛盾点も自ずと解決される。例えば，次の例文を見てみる。

(24)　“他洗澡了嗎?”（彼はお風呂に入ったか？）

a. “洗了。這會兒正在浴室裏唱著他的招牌歌呢。”（「入ったよ。今お風呂で十八番を歌ってるところだ」）

b. “洗了。現在在廚房裏小酌呢。”（「入ったよ。今キッチンでちょっと一杯やってるところだ」）

(24a)(24b)の下線部の“了”は，動態動詞直後でかつ文末の“了”である。(24a)は「洗い始めたこと」を表し，(24b)は「洗い終わったこと」を表している。“洗”が“了”と結び付いてこの2つの意味を表すことができるのは，“洗”には開始点と終結点という2つの限界があり，さらに“了”が限界達成という意味の完結相機能を持っているからである。

以上，2つの位置の“了”と動態動詞(句)との関係を述べた。では，状態動詞(句)・形容詞(句)と結び付く“了”にも，同様な説明を与えることができるのだろうか。次の4.3節～4.4節では，この点について考察する。

4.3. 状態動詞(句)と結び付く“了”

“了”が状態動詞(句)と結び付いた場合，“了”の前後に目的語があるかないかにかかわらず，いずれも「完結」を表すことができず，「開始」しか表すことができない。この点について，次の例文を見てみる。

(25) a. 好主意我有了！(いい考えを私は思い付いた！)

b. 我有了好主意！(私はいい考えを思い付いた！)

c. 我有好主意了！(私はいい考えを思い付いた！)

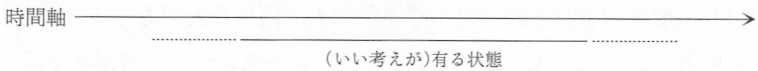
“有”は「有る」「持っている」という意味を表し，“有好主意”は「いい考えが有る」「いい考えを持っている」という意味を表す。これらの例文に示されるように，“了”の位置にかかわらず，いずれも開始・変化を表している。

では，“了”が“洗”・“洗澡”と結び付いた場合に「開始」と「完結」を表すことができるのに，“有”・“有好主意”と結び付いた場合は「開始」しか表すことができないのは，なぜだろうか。

前述の Chao (1968)，Li & Thompson (1981)，吕叔湘主编 (1999) などの先行研究もそうであるが，従来の研究の多くは，その理由を，状態動詞と結び付く“了”と動態動詞と結び付く“了”とは異なるマーカーだからである，と考えていた。それに対し本稿では，それは決してそれぞれの“了”が異なるマーカーだからではないと考える。そうではなく，状態動詞(句)と動態動詞(句)とに内在する「事象アスペクト (事象に内在するアスペクト的意味)」が異なるため，それぞれが限界との関係を異にするからである，と考える。

ここでは，まず“有”“有好主意”を時間軸に位置づけて，前掲の(17)「“洗澡”の時間的図式」と比較してみたい。

(26) “有”・“有好主意”の時間的図式



前掲の(17)とこの図(26)との比較から分かるように，“洗澡”が2つの限界を持つのに対し，“有”“有好主意”はいかなる限界も持たない。それはどういうことかと言うと，“洗澡”などの動態動詞(句)が示すのは動的事象(dynamic situation)であり，“有”“有好主意”などの状態動詞(句)が示すのは静的事象(static situation すなわち Stative)である，ということである。動的であるか静的であるかで，その事象における「限界(endpoint)」の在り方が異なっているのである。

いかなる事象でも，それを始めたり終わらせたりするためには，必ず運動を起こさなければならない。すなわち，事象の開始点や終結点などといった「限界」は常に動的であり，静的ではありえない。そこで，動的事象は動的な限界を含んでいるのに対し，静的事象は動的な限界を含みえない(Smith(1997))。持続しか内在しない静的事象を時間軸に位置づけたとしても，時間性のない属性を時間性のある状態として捉えているに過ぎないのである。

しかし，本来限界を持たない静的事象にも，動的な限界を与える手段がある。中国語においては“了”がその1つの手段である。この点について，前掲の(25)を次の(27)と比較してみる。

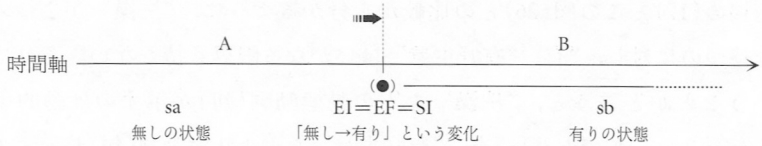
(27) a. 好主意我有。(いい考えが私にはある。)

b. 我有好主意。(私はいい考えがある。)

(25)と(27)との比較から分かるように，“了”を用いていない(27)は「思い付いた」という変化の意味を表さない。それに対し，“了”を用いている(25)は「思い付いた」という変化の意味を表すことができる。それは，“了”が静的事象と結び付いた結果，状態変化を起こさせているからである。すなわち，本来いかなる限界も持たない静的事象でも，限界達成の操作を行なう“了”が結び付くことにより，動的な限界を与えることになるからである。

この場合における“了”の操作の図式は，次のようになる。

(28) “有”・“有好主意”と結び付く“了”の操作の図式



本稿では，静的事象や静的局面の開始点（state initial endpoint）をSIで示し，静的な持続を直線で示す。この図において，EI＝EF＝SIは，“有”“有好主意”が“了”と結び付いた結果，瞬間的な変化を起こすとともに状態が開始される「限界」点である。この限界を示す●を括弧で括ったのは，この限界が本来的に静的事象（直線部）に内在せず，“了”によって与えられたものだからである。

このように，“了”と状態動詞(句)との関係を分析することを通して，状態動詞(句)と結び付いた場合，“了”の位置にかかわらずいずれも限界達成という意味の完結相機能を持っていることを明らかにした。

4.4. 形容詞(句)と結び付く“了”

では，形容詞(句)と結び付く“了”も同様な機能を持っているのだろうか。この点について，次の2組の例文を見てみる。

(29) a. 她不覺地臉紅了。（彼女は思わず顔が赤らんだ。）

b. 她不覺地紅了臉。（彼女は思わず顔を赤らめた。）

(30) a. 他的膽子大了。（彼は大胆になった。）

b. 他大了膽子。（彼は大胆になった。（cf. 彼は肝っ玉を大きくした。））

この2組の例文からも明らかなように，形容詞(句)と結び付いた場合，目的語などがあるかどうかにかかわらず，あるいは“了”の位置にかかわらず，いずれも「開始」しか表すことができない。それは，形容詞(句)が状態動詞(句)と同様に静的事象（Stative）すなわち状態・属性を示すからである。そこで，“了”が形容詞(句)と結び付き，やはり限界を与えて変化を起こす

のである[10)]。

前述のように，木村（1997b）では，形容詞が“了”と結び付いて「変化」を表す場合は，その形容詞が「変化動詞」と同様な意味成分を持つ「動態形容詞」だからである，としていた。しかし，形容詞によって示すのは静的事象であり，動的事象を示す変化動詞と同様な事象アスペクトが内在するわけはないのである。

形容詞が“了”と結び付いた場合も，変化動詞が“了”と結び付いた場合と同様に，結果的に変化という意味が得られるが，しかし次のような相違点がある。すなわち，変化動詞が“了”と結び付いた場合に変化という意味が得られるのは，その事象に内在する限界への達成を表すからである。それに対し，形容詞が“了”と結び付いた場合に変化という意味が得られるのは，限界達成の“了”が，本来は限界を持たない静的事象と結び付いた結果，限界を与えることとなり，変化を引き起こすことになるからである。

木村（1997b）では，形容詞と結び付く“了”は変化の機能を担わないと述べているが，しかし実は，この“了”が他でもなく変化の機能を担っているのである。つまり，アスペクト領域において，“了”の中心的概念「限界達成」が「変化」として具現化されるのである[11)]。

5. 位置によって機能上の相違が生じる理由

前述のように，従来の研究では，動詞直後の“了”の機能を「完成・完了・完結」とし，文末の“了”の機能を「実現・変化・新事態の発生」とし，両者は「同音同形異義語」であるという前提に立った上で，“了”の問題を考えてきた。しかし，動詞直後の“了”と文末の“了”とは異なる機能を持つ異なるマーカーであるという考えにこだわっていると，問題の本質を見失い，一貫した説明を与えることができなくなってしまう。

それに対し本稿では，事象アスペクトとの関係を分析することで，以下のことを明らかにした。すなわち，“了”が持続的な動態動詞(句)と結び付いた場合に「開始」も「完結」も表すことができるのに対し，状態動詞(句)・形容詞(句)などと結び付いた場合に「開始」しか表さないのは，“了”のアスペクト機能が「限界達成という意味の完結相」だからである，ということである。

では，時間補語などの数量補語がある場合でも，その“了”は同様なアスペクト機能を持っているのだろうか。刘月华ほか(2001: 364)では，状態動詞・形容詞と結び付く“了”について，例えば“亮了”のように，後に時間補語がない場合は「状態の出現かつ継続」を表すとし，その“了”を文末の語気助詞の“了”としていた。一方，例えば“(他的臉)紅了一陣子”(彼は顔をしばらく赤らめた)のように，後に時間補語がある場合に「状態の終結」を表すとし，その“了”を動詞直後のアスペクト助詞の“了”としていた。その点は，Chao(1968)も同様な考え方である。

しかし実は，“(他的臉)紅一陣子了”(彼は顔をしばらく赤らめた)のように，時間補語を“了”の前に置いても，やはり開始の意味を表さず，完結の意味を表すことになる。ということは，数量補語がある場合，“了”の位置いかんにかかわらず，いずれにせよ同様なアスペクト的意味を表すのである。

それは，数量補語による量規定を与えた場合，その事象が分割できない，1つのまとまった単位となるからであり，点的事象と同様に1つの限界しか内在しない事象となるからである。そこで，“了”と結び付いた場合，その唯一の限界に対して限界達成の操作を行なうことになる。この場合の“了”のアスペクト機能は，やはり限界達成という意味の完結相なのである。

もちろん，“了”を動詞直後に置くか文末に置くかによって，何らかの違いを感じさせることがあるのは，確かである。例えば，“(他的臉)紅一陣子了”のように，数量補語の後に“了”(すなわち文末の“了”)を置く場合は，その事象がなお持続し，いわゆる「継続パーフェクト(continuous perfect)」

を表すことが多い。また，文末に“了”がない場合は，文終止できないことがある。さらに，動詞直後の“了”と文末の“了”とはしばしば異なる文脈に用いられる。以上のさまざまな相違があるからこそ，従来の研究では2つの位置の“了”を「2つの同音同形異義語」と考えてきたのである。

しかし，これらの違いが生じる原因は，いずれも“了”が位置によってそのアスペクト機能を異にするからではない。それは，“了”が文末に置かれる場合は，しばしばモダリティ機能も同時に働いているからである。この点について，次の2つの文の比較を通して考えたい。

(31) a. 我喝了三杯。（私は三杯飲んだ。）

b. 我喝三杯了。（私は三杯飲んだ。／私はもう三杯(も)飲んだ。）

この2つの文のアスペクト的意味は，どちらも「三杯飲んだ」ということを表している。しかしこれらの2つの文はふつう異なる文脈で用いられる。

(31a)は，例えば“我喝了三杯,吃了點小菜,就上路了。”（私は(酒を)三杯飲んで，つまみを少し食べて，出発した。）のように，事態の連続の中に取り込まれる場合に用いられる。この場合，“我喝了三杯”の“了”は「単なる完結相(perfective)」として機能している。また(31a)は他にも，例えば“你的臉怎麼那麼紅啊?”（あなたの顔はなぜそんなに赤いの？）といった質問に対して答える場合にも用いられる。この場合，“我喝了三杯”は，発話時の状態とのかかわりにおいて，その状態をもたらす過去の出来事として振り返って述べられている。この“了”は，「出来事パーフェクト (actional perfect)」として機能している[12)]。

このように，(31a)の動詞直後の“了”は，単なる完結相として機能する場合と，出来事パーフェクトとして機能する場合とがある。但しそのいずれも，その事態が生起したこと自体を主として述べているのである。

一方，(31b)はどうだろうか。文末の“了”で述べる場合は，その事態が生起したことだけにとどまらない。(31b)は，例えば“咱們再來乾一杯!”（もう一度乾杯しよう！）と酒を勧められた場合や，話し手が“現在該談正事了。”

(今からまじめな話をしよう) と述べる場合，すなわち次の局面へ展開する場合などに用いられる。この場合，「三杯」という量が，話し手が想定していた前提の「(酒を)飲む十分な量」をすでに達成していることをも表しうる。そこでしばしば「十分飲んだ」や「もう三杯も飲んだ」という，モダリティ的ニュアンスを伴った意味を表すことになるのである (春木・劉 (2003))。

この2つの文の比較から，次の2つのことが分かる。1つ目は，“了”を異なる位置に置くことで生じる相違は，あくまでもモダリティ的意味による相違であり，アスペクト的意味自体は変わらない，という点である。出来事パーフェクトとして機能する場合，テンス的意味を持つという点で単なる完結相とは異なるものの，そのアスペクト的意味はやはり「限界達成という意味の完結相 (perfective)」なのである。

2つ目は，動詞直後の“了”がよりアスペクト機能に比重がかかっているのに対し，文末の“了”はよりモダリティ機能に比重がかかっている，という点である。実は，文末の“了”によって，しばしば文終止を表すのも，またしばしば「継続パーフェクト」を表すのも，いずれも文末の“了”がモダリティ機能を持っているからである。モダリティとは，「表現主体の表現時における心的態度を表すもの」である (益岡 (2000: 197))。モダリティ機能を持っている文末の“了”によって述べることで，構築されていた前提が満たされ，展開される発話時の状況に繋がっていくのである。

また，位置によるこのような機能上の相違が，一般に動詞直後の“了”を「アスペクト助詞の“了”」と呼び，文末の“了”を「語気助詞の“了”」と呼んでいる理由である。またこれは，王力 (1943–1944; 1944–1945) が，動詞直後の“了”を「完成相」のアスペクトマーカーとし，文末の“了”を「決定のムード (“決定語氣”)」のマーカーとする理由でもある。さらに，Li & Thompson (1981) では動詞直後の“了”を「完結性」のアスペクトマーカーとし，文末の“了”を「現在関連性」のマーカーとする理由である。

しかし，“了”の位置と「アスペクト機能」・「モダリティ機能」との関係

は，あくまでも「比重」の問題に過ぎず，決して王力（1943–1944；1944–1945）の言うような，動詞直後の“了”がアスペクト機能しか担わず，文末の“了”がモダリティ機能しか担わない，ということではない。動詞直後に置かれる場合にもモダリティ機能を担うことがあり[13]，逆に，文末に置かれる場合にもアスペクト機能を担うことがあるのである。

“了”は，位置の相違により，確かに機能上の傾向におけるこのような相違点が見られる。しかしこれは，“了”を「2つの同音同形異義語」として考えてきた先行研究の考え方を支える現象にはならない。

そもそも，多くの言語において，アスペクトマーカー，すなわち「事象の展開の様相」を表すものは，動詞と結び付いたり，あるいは動詞の屈折形態として現れたりする。すなわち，動詞（句）にかかる位置に置かれるのである。一方，モダリティマーカー，すなわち「主観性を表す要素」（益岡（2000: 197））は，文末や文頭や主語の前後などといった，文にかかる位置に置かれる。

そして，中国語の“了”は，2つの位置に置くことができるため，それぞれアスペクト機能とモダリティ機能とに比重を置くことができるようになっている。より正確に言えば，アスペクト機能を基本に持つ“了”は，文末に置くことにより，モダリティ領域でその機能を働かせた結果，そのアスペクト機能と緊密な関連性を持つモダリティ機能を生じさせる。そのため，“了”のモダリティ機能と，“了”のアスペクト機能とは，「限界達成」という1つの共通したスキーマによって繋がっているのである。

6. おわりに

従来の研究の多くは，動詞直後の“了”の機能を「完成・完了・完結相」と規定し，文末の“了”の機能を「変化・実現・開始」と考えてきた。そこ

で，動詞・形容詞の直後でかつ文末の“了”がいったいどちらの“了”なのかは，さまざまな研究を重ねてきたにもかかわらず，現在でも未だに統一見解がない。それに対し本稿では，さまざまな事象アスペクトとの関係を検証することを通して，アスペクト領域におけるその機能を「限界達成という意味の完結相（perfective）」と規定することで，動詞・形容詞の直後でかつ文末という位置の“了”であるか，あるいはその他の位置の“了”であるかにかかわらず，いずれも統一的な説明を与えることができることを明らかにした。

“了”は，構文中の位置いかんにかかわらず，そのアスペクト機能は「限界達成という意味の完結相」である。そして，“了”が動詞(句)や形容詞(句)にかかる場合，それらが示す事象に対してその機能が働く。また，“了”が文にかかる場合，その文によって示す命題に対してその機能が働くのである。

〔注〕

1) 但し，刘月华ほか（2001）は，次のように述べており，やはりその位置によって“了”を2つのマーカーとして区別している。すなわち，2つの位置の“了”は，その基本的語法意義（“基本語法意義”）は特に違うわけではないが，しかし位置と機能（“功能”）が異なるため，やはり2つに分ける（pp. 361–362）。

2) Li & Thompson（1981）では，“懐孕”や“喝光”などを形容詞とする。本稿では，これらのものはいずれも動詞であると考える。“懐孕”は，いかなる限界も内在しない状態動詞である。一方“喝光”は，限界が内在する変化性の点的動詞である。

3) Chao（1968: 798–800）では，文末小辞の“了”は，次の7つの機能を持つとする。(i)“inchoative”，(ii)“command in response to a new situation”，(iii)“progess in story”，(iv)“isolated event in the past”，(v)“completed action as of the present”，(vi)“consequent clause to indicate situation”，(vii)“obviousness”。

4) Li & Thompson（1981: 244–283）では，文末の“了”の上位レベルの機能を「現在関連性（current relevant state）」とし，それには次の5つの下位機能・用法があるとする。(i)“change of state”，(ii)“correcting a wrong assumption”，(iii)“progress so far”，(iv)“what happens next”，(v)“closing a statement”。

5) 木村（1997b）では，“了”が形容詞と結び付いた場合における，“了”の機能と

その形容詞に内在する意味に関する説明について，张国宪（1995）に基づくとしているが，但しこの“了”については木村（1997b）と张国宪（1995）とには次のような相違点がある。すなわち，木村（1997b: 194）では，形容詞と結び付く“了”はあくまでも動詞直後の動詞接尾辞“了”でしかありえないとしている。それに対し，张国宪（1995: 228）では，「確実に言えば，この“了”はアスペクト助詞（“了$_1$”）と語気助詞（“了$_2$”）とを合わせて書いたものであり，すなわち“了$_{1+2}$”である」，としている。

6） 木村（1997b: 193）は“玻璃杯乾淨了。”を非文としているが，本稿は，適切な文脈においてはこの文は自然な文であると考える。

7） 刘勋宁（1988）では，「“了”の否定は“沒有”である。そして，“沒有”が否定しているのは完成した状態ではなく，まるごとの事実である。“了”の意味が“沒有”の逆である以上，“了”の意味は「実有の状態」「事実の状態」のはずである」と述べている。その否定形の“沒有”から類推して，“了”の意味を決定してしまう刘勋宁（1988）の論理には飛躍があり，本稿は同意しない（理由は劉綺紋（2004）で論じている）。

8） “洗了澡!”，“洗澡了!”や“洗了!”はいずれも「お風呂に入りなさい」などの意味もある。この場合の“了”は，アスペクト機能以外に，モダリティ機能も同時に担っている。この点については劉綺紋（2004）を参照。

9） 但し，先行研究によっては，「限界」という用語を，終結的事象（telic situation）における必然的終結点に限定して用いている。例えば，木村（1997a: 166）では「“了”は限界性や変化性を備えた動作表現だけを結合対象に選ぶ」と述べ，動詞直後の“了”に限定し，その機能について「限界性」という用語を用いている。これは，本稿で言う“了”の「限界達成」と類似しているようにも見えるが，実は大きく異なっている。なぜなら，木村（1997a）で言う「限界」は，あくまでも終結的事象における必然的終結点だけに限定しているからである。それに対し，本稿で言う「限界」は，終結的事象における必然的終結点にとどまらない。非終結的事象（atelic situation）にも限界が存在するのである。

10） ここでは，“她不覺地紅臉了。”（彼女は思わず顔を赤らめた。）を挙げていないのは，“紅臉”が一般に形容詞(句)として扱われていないからである。また“他大膽了。”（彼は大胆になった。）を挙げていないのは，“大膽”自体が形容詞だからであり，この“了”が(30a)の“了”と同様に，形容詞と結び付いているからである。但し，これらの“了”のアスペクト機能は，限界達成という意味の完結相という点においては変わらないのである。

11） 但し「限界達成」は，程度領域やモダリティ領域では「変化」として現れない。「変化」は時間的概念であるのに対し，「限界達成」は時間的概念も非時間的概念も

含んだ，「変化」よりも上位レベルの概念なのである（春木・劉（2003），劉綺紋（2004））。

12） パーフェクト（perfect）のうち，先行事象をプロファイルするのは「出来事パーフェクト（actional perfect）」である。一方，参照時における結果状態をプロファイルするのは「状態パーフェクト（statal perfect）」である（劉綺紋（2002a; 2002c））。

13） 動詞直後の“了”はアスペクト機能しか担わない場合が多いが，モダリティ機能も同時に担っている場合もある。例えば，肯定命令文の“洗了澡!”や，否定命令文の“别喝了那瓶酒!”や，「“沒有”＋動詞句」の否定文の“幸虧沒扔了它，今天又用上了。”（吕叔湘主编（1999））などにおける動詞直後の“了”がそうである。

〔用例出典〕（下線部は用例出典の略記号）

曹雪芹《紅樓夢》（松枝茂夫（訳）『紅楼夢（改訳）（三）』）。劉大任《浮游群落》（岡崎郁子（訳）『デイゴ燃ゆ』）。老舍〈駱駝祥子〉（立間祥介（訳）『駱駝祥子』；中山高志（訳）『駱駝祥子』）。錢鍾書《圍城》（荒井健ほか（訳）『結婚狂詩曲（囲城）（下）』）沈從文《邊城》。沈国威『電脳による中国語研究のススメ』。王朔《王朔文集 1 純情卷》。張愛玲《赤地之戀》；〈金瑣記〉；〈留情〉；〈紅玫瑰與白玫瑰〉（池上貞子（訳）「金鎖記」；「留情」）。朱天文〈安安的假期〉（田村志津枝（訳）「安安の夏休み」）。

〔参考文献〕

Chao, Y. R. 1968. *A Grammar of Spoken Chinese.* Berkeley: Univ. of California Press.

高名凱 1948.《汉语语法论》（北京：商务印书馆，1986）

春木仁孝・劉綺紋 2003.「語気助詞“了”のモダリティー機能――アスペクトからモダリティーへ――」（『（言語文化共同研究プロジェクト 2002）言語における時空をめぐって』大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科，pp. 33–42.）

Яхонтов, С. Е. 1957. *Категория Глагола в Китайском Языке.*（橋本萬太郎（訳）『中国語動詞の研究』東京：白帝社，1987）

木村英樹 1997a.「動詞接尾辞“了”の意味と表現機能」（『大河内康憲教授退官記念中国語学論文集』東京：東方書店，pp. 157–179.）

――― 1997b.「‘変化’和‘动作’」（『橋本萬太郎紀念中国語学論集』東京：内山書店，pp. 185–197.）

Li, C. N., & S. A. Thompson. 1981. *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar.* Berkeley: Univ. of California Press.

黎锦熙 1924.《新著国语文法》（北京：商务印书馆，1992）

劉綺紋 2002a.「パーフェクトとしての“-了”と“-過”」（『岐阜経済大学論集』35-3，岐阜経済大学学会，pp. 199–234.）

――― 2002b.「状態パーフェクトとしての“-著”」(『大阪大学言語文化学』11，大阪大学言語文化学会，pp.65–76.)

――― 2002c.「テクストにおける“-了”の機能――パーフェクトを中心に――」(『岐阜経済大学論集』36-1･2，岐阜経済大学学会，pp.201–231.)

――― 2004.『中国語のアスペクト体系の再構築に向けて――“了”・“著”・“過”を中心に――』(大阪大学大学院言語文化研究科博士学位論文)

刘勋宁 1988.〈现代汉语词尾“了”的语法意义〉(《中国语文》1988 年第 5 期，pp.321–330.)

刘月华・潘文娱・故铧 2001.《实用现代汉语语法（增订本)》(北京：商务印书馆)

吕叔湘（主编）1999.《现代汉语八百词（增订本)》(北京：商务印书馆)(牛島徳次・菱沼透(監訳)『中国語文法用例辞典』東京：東方書店，2003)

益岡隆志 2000.『日本語文法の諸相』(東京：くろしお出版)

Smith, C. S. 1997. *The Parameter of Aspect,* 2nd edn. Dordrecht: Kluwer.

王　力 1943–1944.《中国现代语法》(北京：商务印书馆，1985)

――― 1944–1945.《中国语法理论》(《王力文集　第一卷》济南：山东教育出版社，1984)

楊凱栄 2001.「中国語の“了”について」(『「た」の言語学』東京：ひつじ書房，pp.61–95)

张国宪 1995.〈现代汉语的动态形容词〉(《中国语文》1995 年第 3 期，pp.221–229.)